

造形活動の初期的行為としての探索活動 —造形遊びと比較検討する—

奥 美 佐 子

I はじめに

1978年(昭和53年)、小学校の「図画工作」に新たな学習内容が加わった。今日では図画工作の内容として定着した感のある「造形遊び」が、「造形的な遊び」という呼称で小学校学習指導要領に低学年において扱う内容として始めて登場したのである。その後、1989年(平成元年)に「造形遊び」という名称になり低・中学年で扱う内容となった。「造形遊び」は1999(平成11年)年の改定において全学年で扱う内容になった。

幼稚園教育要領並びに保育所保育指針には、表現の内容に「造形遊び」という記述はないが、実質的には小学校の図画工作の内容をスライドするように、幼児教育現場で造形遊びが取り入れられた。一部には造形表現の遊びをすべて造形遊びと呼ぶ誤解もあるようだが、造形遊びは確実に浸透している。

造形遊びは材料をもとにして、子どもが自分の目的を見つけて主体的に展開する造形活動である。造形遊びの内容は、「もの・場」「からだ」「思い」を軸として展開する。¹⁾それぞれの軸から展開する遊びはデュシャンが扉を開け、その後1960年代以降に多様な方向に展開した現代美術に非常に類似した様相をもっている。美術教育における題材や手法、コンセプトは少なからず文化財としての美術や社会現象としての美術に影響を受けてきた。造形遊びはその手法を現代美術のコンセプトあるいは方法論的に影響を受けていると言える。また、0～2歳児の造形行為に非常に類似した行為的な表現が多く見られ、発生的な行為や生得的な行為など初期的な造形行為が繰り返される。ものや場所に関わる姿は、乳児の探索活動と同様のイメージを描ける。

本稿では、造形活動の内容のひとつである「造形遊び」と初期的造形行為を比較検討することから、乳児の探索活動が包括する造形活動の初期的

様相に注目し、乳児期の探索活動が造形表現の基礎的能力を培うものとしてこの両者の関連について考えたい。

II 「造形遊び」

1. 「造形的な遊び」の導入

図画工作の領域はこれまで、絵画・彫塑・デザイン・工芸・鑑賞の5領域が置かれていた。しかし、1978年、5領域を併記することによる題材数の過多傾向と内容の過密化、小学校の児童の造形的な活動の未分化な面を省みて基本的で総合的な領域が考慮されるべきだとして、学習指導要領には「鑑賞」と「表現」2領域で表されることになった。描いたり造ったりすることを含めた造形表現の基本的で総合的な領域として「表現」ができ、低学年で扱う内容として登場したのが「造形的な遊び」であった。1978年度から新設された「造形的な遊び」の意義とこれを新設した理由を小学校指導書に次のように記されている。

低学年の造形活動は遊びから始まり、次第に意図的、目的的なものに発展していくのであって、まず最初は、遊びの中で「表現の喜びを味わわせる」という活動が適当である。このような観点から低学年では、「材料をもとにして、楽しく造形活動ができるようにする。」と示し、「造形的な遊び」を行うようにした。これは総合的な造形活動であり、就学前の造形活動との関連を考えて、造形的な遊びを通してその楽しさを味わわせ、造形学習への意欲を起こさせていこうと意図したものである。²⁾

幼児期からつながる未分化な造形表現の特性を踏まえて活動が総合的に展開すること、造形本来の「ものとかかわる」ことを中心に据えて造形の楽しさを経験することを低学年における造形

の目標としたのである。

2. 「造形遊び」低・中学年から高学年へ

1989年「造形的な遊び」は「造形遊び」となった。この年「造形遊び」は小学校低・中学年に導入された。以下は中学年にも造形遊びを導入した理由について小学校指導書に示された部分の抜粋である。

特に、低学年の「材料をもとにした造形遊び」を充実させるとともに、中学年にもその内容を発展させて位置付け、主体的な造形活動の楽しさやその喜びを味わわせ材料体験などを豊かにするようにした。³⁾

10年後の1999年、造形遊びは高学年に導入された。高学年における造形遊びの位置付けについて1999年の小学校学習指導要領解説には、

小学校図画工作については、児童が楽しく造形活動にかかわり、個性を生かして多様で創造的な活動をしていくために、その基礎となる感覚・感性や想像力、技能などの資質や能力を育てることを重視して、次のような改善を図る。

(ア) 省略

(イ) 「表現」の領域については、多様で創造的な表現を促す観点から、現在低学年と中学年において指導することとしている。材料などをもとにして楽しく造形活動を行う内容を高学年でも指導することとしている。また、絵に表すことや立体に表すこと、つくりたいものをつくることの内容を一層関連付けたり一体的に扱えるようにする。⁴⁾

と示された。

3. 指導要領に見る「造形遊び」の位置付け

1978年～1999年度版学習指導要領から、「造形遊び」は、「材料をもとにした総合的な造形活動」「主体的な造形活動」「造形の基礎となる感覚・感性や想像力、技能などの資質や能力を育てる活動」であることがわかる。

4. 「遊び」と「造形遊び」

自由遊びの時間や休み時間に園庭や運動場で、または家庭や公園での遊びは、造形遊びと同質なのだろうか。制約のない自由な遊びの中で、自然発生的な造形的遊びが出現することもあるが、自然の遊びは自らの関心で行い、開始も終結も自己の判断で行われる。造形遊びは組織的、計画的な学校教育制度の下で行われる教育内容である。物的環境のみ準備して、あとは子ども任せの放任の保育・教育を造形遊びと称する例があるのははなはだしい誤解であろう。

同質な点は、ともにものを直接扱いながら、主体的に想像を拡げたり活動そのものを楽しんだりするところである。遊びはその特性として自発性、柔軟性、創造性、行為性をもつ。これは造形活動の不可欠の要素である。

5. 学習指導要領による「造形遊び」小括

- ・「造形遊び」は遊びの特性であり造形活動に不可欠の要素である自発性、柔軟性、創造性、行為性を有し、ものを直接扱いながら、主体的に想像を拡げ、活動そのものを楽しむ遊びとその土俵を共有している。
- ・「造形遊び」は遊びの特性を生かし、集中的に充実させて子どもが自己実現し、価値ある活動の場にすることが期待される。造形欲求や表現衝動から世界を認識する活動として、人間教育の根幹に関わる内容をもつ。
- ・「造形遊び」は子どもが楽しく造形活動にかかわり、個性を生かして多様で創造的な活動をしていくために、その基礎となる感覚・感性や想像力、技能などの資質や能力を育てることを重視した、組織的、計画的な学校教育制度の下で行われる教育内容である。

「造形遊び」は造形要素を集中してまたは継続的に経験する主体的でかつ極めて造形的な遊びでもある。(学習指導要領の抜粋に関しては別添資料参照)

III 探索活動

1. 保育所保育指針に見る「探索活動」

探索とは探り極めることを言う。探索は幅広い分野で使用する語であるが、ここでは扱うのは0

～3歳未満児の探索である。

1999年改定された保育所保育指針に探索、探索活動、探索行為、あるいは探索意欲という文言は6か月から1歳3か月未満児～2歳児の年齢区分のみに登場する。指針の年齢区分別「発達の特徴」にある‘探索’の記述部分を抜粋し、指針から探索活動をまとめてみよう。

6か月から1歳3ヵ月未満児

9か月頃までには、はうことや両手に物を持って打ちついたり、たたき合わせたりすることができるようになる。身近な大人との強い信頼関係に基づく情緒の安定を基盤にして、探索活動が活発になってくる。

1歳3か月から2歳未満児

生活空間が広がり、子どもはこれまでに培われた安心できる人間関係を基盤として、目の前に開かれた未知の世界の探索行動に心をそそられ、身近な人や身の回りにある物に自発的に働きかけていく。-中略- この時期は、保育士に受け入れられることにより、自発性、探索意欲が高まるが、まだまだ大人の世話を必要とする自立への過程の時期である。

2歳児

日々の生活の中での新たな体験は、子どもの関心や探索意欲を高め、そこで得られた喜びや感動や発見を、自分に共感してくれる保育士や友達に一心に伝えようとし、一緒に体験したいと望むようになる。このような子どもの欲求を満たすことによって、諸能力も高まっていき、自分自身が好ましく思え、自信を持つことができる。⁵⁾

‘探索’は目前に開かれた未知の世界に興味をもち、それらに自発的に働きかける行為である。探索活動は9か月頃を目安に盛んに行われるようになる。探索行動は1歳3か月～2歳児にかけて自発的に行われる。喜びを伴う体験は探索意欲を高揚し、諸能力を高め子どもに自信を与える。

探索活動は保育者の積極的かつ肯定的受容と共感が不可欠の要素であることが、繰り返し指針

に述べられている。

2. 乳児期における探索活動の重要性

探索行動は9か月頃から始まり大人になってからも様々な時空で多様な方法で行われる。乳児期の早い時期から始まる探索活動をすることなく育った子どもが、社会生活並びに人間関係の構築に困難をきたす場合さえ生じる。

生まれたばかりの赤ちゃんは自分とそれ以外の世界との区別がついていない。自分の身体に触れる、なめるなど、また、周りの環境にあるものにも自分の身体と同様にかかわり、自他の区別に気付く。探索行為は自我を育てる行動だといえる。⁶⁾

1歳児がペットボトルの蓋を開けようと手指を懸命に動かす。保育士の「くるくるくるくる」と言う言葉のリズムに合わせるように指を動かした。蓋がとれたとき、「開いた」と保育士が言う。子どもは何度も何度も繰り返す。こうすればこうなる、この時期の子どもなりの見通しが立った訳で、推論能力を培うとも言えよう。

這い這いで移動することや、歩行ができるようになるころから上記のように指先を使う行為や、生活空間に身体ごとにかかわる行動を意欲的にする。身体そのものや、末端の機能を使うことで、行為能力を育てることも見逃せない。また、さまざまな状況に遭遇することから、状況を判断する能力もついてくる。

保育所保育指針2歳児の「発達の特徴」にあげられたように、この頃には子どもたちの諸能力も高まっていき、自分自身が好ましく思え、自信をもつことができる。自分自身の有能感を実感できることは、意欲をもって人的物的環境に関わる力が育つことを意味していよう。

「ものにかかわり、ものを変化させること」、造形の最も広い定義にある、関わる力、認知する力を探索活動はもたらしてくれる。

IV 初期的造形行為は表現か

この小論は0歳～2歳児の造形表現がテーマである。この小論を進めるにあたって、彼らが世界と関わる様々な行為の事例を示し、0～2歳児の造形行為が表現であることを示すことを試み

なければならない。

0～2歳児の造形も類型を作成すると、造形遊びの類型と非常に似たカテゴリーをもつのではないかと考える。

1970年頃、筆者は3歳未満児の造形現場と出会うことになったのだが、0～2歳の造形行為と関わる機会を得るたびに、それを表現だと受け止めていた。しかし、当時はスクリブルから抜け切らない子どもの造形行為は発達的に表象性をもたない時期だと見做され、表現とは区別して表出という語で表され、それは現在も使用されている。

表現とは何かについては、定義が難しい。「表現」とは、ある内面世界の出来事が、外的知覚可能な現象に至ると言う事態であり、例えば笑う、泣くと言う場合がそうであるように、外的知覚可能な表現からかなりの信頼度でその内的過程が推論できる方法でなされる。モレンハウアーは表現と認識する事態は、すべて、この主観的确实性と相互主観的類似性の違いの中にあり、何かを表現している人の体験形式と、この表現を知覚する人の体験形式は互いに密接に結びついていると言う。

では、表現の中で何が表現されているのか、どのようにして美的対象の質と、制作者または受容者の諸感覚が互いに結びつきあうのか。これらの関係性についてグッドマンは「メタファー的例示」という術語を使用して、「赤」「なぐりがきの跡」などの記号は、語義通りにそれが外的世界の対象の見本をただ差し出しているものと理解されるべきものでなく、メタファーとしても、つまりあたかもそれが自己感覚を表現しているかのようにも受け取られねばならないと論じている。

美術史的な作品においても、発達的な見解を必要とする場合においても、制作物が伝達という観点から問われるときに、人格やイコノロジーは役に立たない。また、プレスナーが表現の過程と考えていたものとの相違を認めつつ、「子どもたちの美的制作物、少なくともそのいくつかは、「……の自発的表現」であり、笑う、泣く、叫ぶことと同じ」だという考えを採用している。⁷⁾

ものや場と関わる行為、これが造形することであるが、それ自体で喜びを得るのも現実である。行為や制作物を伝達という観点で、さらに制作者

と受容者を上記のような関係性で捉えると、0歳児が紙片を掴もうとする行為や、1歳児のスクリブルの跡は表現である。

グッドマンは、芸術の定義を試み、その特質に充溢性、表現性、コンポジションをあげた。1979年、カロサーとガードナーは充溢性と表現性に対する子どもの感受性の評定を、線描画を使って試みたが、5歳児にはこれらを探る能力、作る能力共にほとんど見出せなかった。しかし、1988年、イツコウィッツらは4歳児がより簡潔な人物画の分節度や線の質に対する感受性をもっていることを示した。

ボーンスタイン、フェルディナンセン、グロスは1981年、4か月の乳児が水平に対照的なパターンや非対称なパターンよりも、垂直に左右対称のパターンのほうをより効果的に処理すること、対称性の好みについては4か月児にはなかったが、12か月児は垂直の左右対称を好むことを発見した。⁸⁾

幼児が自他の造形に充溢性や表現性に気付いているという証拠はないが、乳児がコンポジションに対して感受性をもっているという事実は、これを芸術理解の極初期的現象とすることができよう。

V 初期的造形行為と造形遊びの対照

0～2歳児の造形は造形遊びと同じ「表現」のフィールドで論じられる。そこで、造形遊びと0～2歳児の造形行為の事例をあげ、内容を活動の要素から分析し、比較検討する。

1. 造形遊びの内容の分類

(1) 造形遊びのエレメント

小学校学習指導要領に示された「造形遊び」は、「材料をもとにした」遊びや、材料をもとにした遊びの展開を主眼としている。造形遊びの内容は決して材料至上主義ではない。従来からの、イメージを造形メディアに変換して表現することへの内容の偏りを戻すことによって、結果中心の作品主義から美術教育を子どもの遊びとしての美術へ引き戻すことも、ねらいの一つであったと考える。

「材料＝もの、空間＝場、操作、構成」を造形遊びの内容を構成するエレメントとし、子どもの

「思い」がそれぞれのエレメントから造形活動が展開する鍵だと考える。造形遊びは一つのエレメントから展開していくが、それぞれのエレメントが複合的に絡み、個々の子どもの思いが活動を方向付けていく場合もあり、単純に活動を割り切ることができない場合もあることを理解しておく必要がある。

(2) 内容の変遷

造形遊びの内容は時代と共に変化している。1975年に小学校学習指導要領に造形遊びという語が初出した。その後に編集された保育者養成系教科書3冊に扱われた造形遊びの内容に関する記述を年代順に見てみよう。

1979年版では、造形遊びは造形活動の周辺的な「つくりあそび」としての位置づけであった。⁹⁾

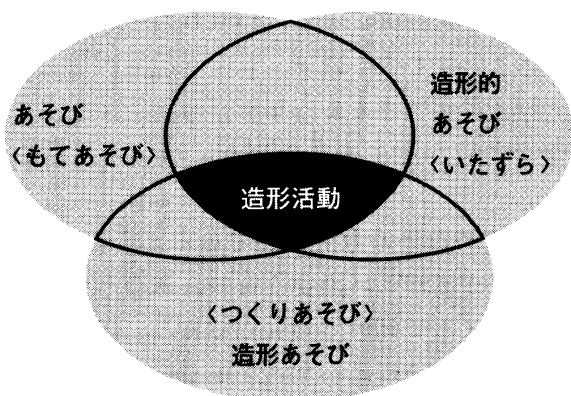


図1 「造形的遊び」 1979年版教科書での扱い

1994年版は内容を「空間遊び、材料遊び、構成遊び、操作遊び、模倣遊び」に区分している。¹⁰⁾ 2002年版では「材料をもとにして遊ぶ、場所や空間で遊ぶ、構成を楽しんで遊ぶ、操作を楽しむ遊び」となる¹¹⁾(図2)。造形遊びの内容は流動的であり、今後も変化する可能性を残す。

ここでは、2002年度版を参考にし、(1)であげた内容のエレメントを比較検討の項目とする。

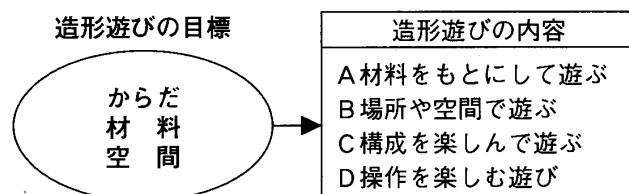


図2 「造形遊び」の内容 2002年度版教科書

(3) 「造形遊び」の事例から

①紙をつなぐ

幼児の造形遊びの事例として、2002年2月23日、28日の両日に名古屋柳城短期大学附属三好丘聖マーガレット幼稚園で、5歳児および3歳児を対象に実施した保育実践から1例をあげる。以下は活動の流れに沿った実践の記録である。

5歳児にじ組29名(男児20名、女児9名)を対象に、紙を「つなぐ」操作を遊びのエレメントとして提案し、活動を始める。

素材として幅約2cm、長さ約15, 25, 30cmに切った3種類の白画用紙の帯紙を相当量準備し、本時の遊び空間である園舎2階のにじ組の保育室に5か所配置する。紙の接合剤としてセロハンテープを8か所に置いた。活動のきっかけとして、色画用紙で水道の栓に模して造ったものを、子どもたちと相談して保育室の壁や扉に7か所、保育室に面した廊下の手摺部分に1か所、合計8か所貼り付けた。

つなぐ行為はすぐ開始された。それぞれの水道の蛇口から帯紙を一筋になるようにつなぎ始めた。やがて保育室の壁や扉などの立面から床面へ活動が拡がり、分岐したり友達と合体したり、また並行に走った2本の線に線路のように帯び紙を渡すなど、帯紙の扱いはさまざまに変化していった。

廊下に貼った蛇口からは活動が別の空間に拡がりを見せた。数人の子どもたちが協同してつなぎ、やがて階段を降って職員室へ達した。園長先生のもとへ行くことを目的にした子どもたちと、玄関先の植木や花に水をやるつもりの子どもの出現した。

このころ、保育室では紙をつなぐ行為が床一面に拡がっていた。子どもたちの動きは、保育室内と保育室外に分かれていった。保育室外に活動の場を広げた子どもたちは、玄関から園庭に向かい、3, 4歳児クラスの前にあるテラスへ、次に園舎の隅の三輪車置き場へ、そして園庭のフェンスに沿って運梯へ伸びる勢いであった。

玄関から枝分かれしたグループは、外の階段を上り、2階のテラスからにじ組の保育室へ帯紙をつなぎ、保育室内の帯紙と見事合体した。

②エレメントの増幅

この活動は、つなぐ操作から始まったものである。活動の流れが進むに連れ、エレメントは多様

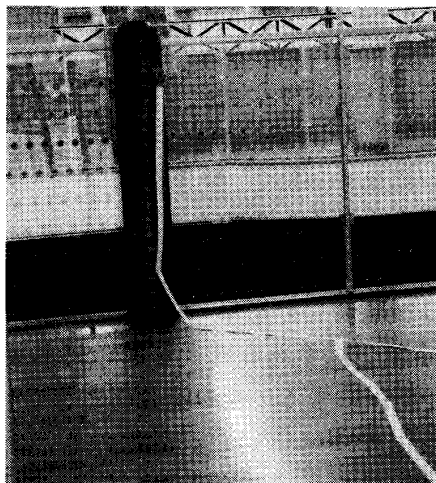


図3 スタート地点 つなぐ 5歳児



図4 空間へ 5歳児

化していった。つなぐ行為を軸としながら、場所や人を目当てにした子どもと、水のイメージを展開した子どもがいたことになる。

造形遊びは、あるエレメントから遊びを始め、それを軸とした遊びのプロセスで自分の目的をもつことに意義がある。この活動も、操作という土台となるエレメントを保ちながら、場や空間、イメージなどの要素が後発的に生じる(図3)。子どもの遊びは操作そのものや、素材である紙や接合材であるセロハンテープ、場や空間、友達との共同等に思いを深め、それぞれの造形体験が展開していったと考える。造形遊びのエレメントは、活動の進行とともに縦横に振幅する。

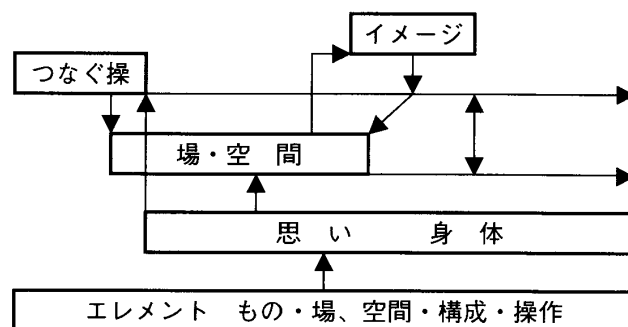


図5 「造形遊び」事例における活動の推移

2. 初期的造形行為の内容の分類

(1) 初期的造形行為の活動事例

初期的造形行為は0～2歳児の造形活動を言うが、実際の活動では、どのように造形的な遊びをしているのだろうか。0～2歳児が発生的にもいや場に関わる場面や、保育者が環境を準備して始まる遊びを捉え、そこに現れた遊びの要素に注目することにした。以下、0～2歳児の造形行為の実際を理解できるよう事例を写真で示し、そこに抱合される造形行為の要素について説明を加える。

0歳児が自分の力で移動できるようになると、急に世界が広がる。出会うもの、出会うものすべて彼らにとって初めてのものである。母親、保育者、身近な生活用品、大人が不用意に置き去った紙も興味の対象になる。小麦粉粘土、水や色水など、造形の素材とされる「もの」も同様である。

不思議な段ボール箱に出会った1歳児が、まず入ろうとする。蓋が閉まっていると、あけてみようとする。口唇期から抜けた子どもたちの前に、細かいタイル、秋の自然物どんぐりを出すとペットボトルに入れる、せっかく入れたのに逆さまにして出そうとする。カップにどんぐりをいっぱいに入れて、もうひとつのカップに移し変える。時には、「どぞ」と保育者に差し出し、また何度も熱心に繰り返す姿が印象的である。

場所の不思議を探検するのは、1歳児からの楽しい遊びである。石鹸の泡が消えた。白いはずの石鹸がなぜ青いのだろうか。目で見てわからないので、とにかく触ってみる。感触は大切な感覚である。少しずつ、見立てやつもりの活動へ入っていき、思いの活動へ、またごっこの活動で遊ぶ。

粘土と出会った子どもたちは、たたく、つつく、

ちぎる、のぼす、まるめる、など、粘土操作を繰り返す。丸めた粘土を並べるなど、シール貼りと同様な配列を楽しむ。これらの活動事例の写真が図6～図11である。

0～2歳児の活動を①～⑧のタイプに分類し、活動の特徴と使用頻度が高い素材を表1に示した。



図6 寒天の感触 0歳児



図9 泡 2歳児



図7 ビニールテープを剥がす 1歳児



図10 絵の具で遊ぶ 1, 2歳児



図8 移し変え 2歳児

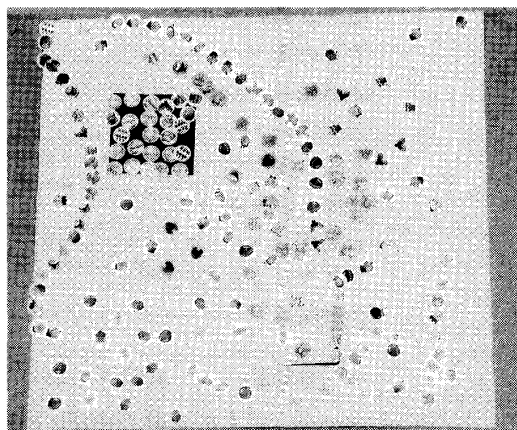


図11 シール貼り 1歳児

(2) 初期的造形行為の類型

子どもの造形行為は生活や遊びの中に様々な様相で出現する。造形活動の内容は、日常の行為を採集した中から選択し、構想するのが常套である。

0～2歳児の造形活動は、3歳以上児の造形活動に比べて、日常の遊びと保育者が意図的に構想した遊びに大きな差異を認めない場合が多い。そこで、表1に示した8タイプの活動を、手法的に

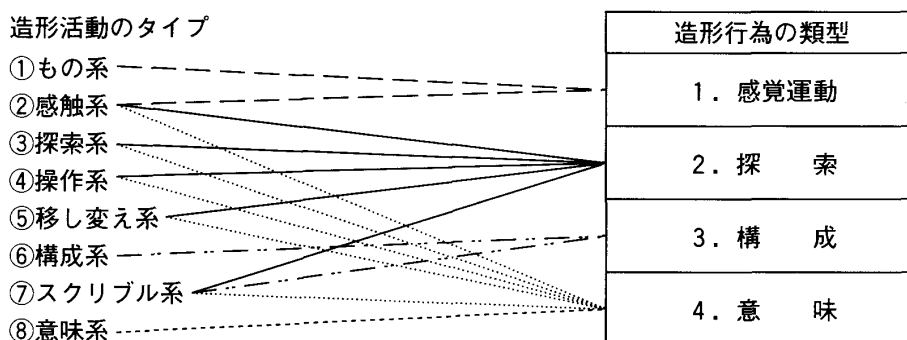
は逆順だが初期的造形行為4類型に整理した。0～2歳児の活動は特に各種の要素が混在しているため、明快に類型を特定しにくい。表2のように8タイプを、感覚運動的な行為、探索的な行為、構成的な行為、意味的な行為に集約した。

0～2歳児は、描画の活動ではまだなぐりがきの段階である。表2でスクリブル系が探索と結ばれているのは、フォームを造る観点からはドローイングやペインティングの前段階だといえるが、

表1 造形活動のタイプ

造形活動のタイプ	活動の特徴と使用素材の例
①もの系	さまざまな素材にたたく、握る、振るなど、この時期の子なりの方法で関わる。身近な生活用具、自然物など。
②感触系	身近な素材に身体、特に手で触れ、快・不快や触感の違いなどに気付く。水、砂、小麦粉粘土、紙、寒天、フィンガーペイント、緩衝材など。
③探索系	生活空間の場やものを探索し、見つけたり試したりして認知する。場所を見つけて隠れる、ものを放り出すなど、保育の場や散歩の空間での探索。
④操作系	ちぎる、やぶる、まるめるなど手、指などでものを変化させる行為。紙、粘土など。
⑤移し変え系	主として両手の操作でものの移動に気付く。水、雑材、ユニットなどを容器にいれ、他方の容器に移し変えることを繰り返す。
⑥構成系	形、表現空間構成に対する試行。並べる、積む、囲うなど、配列や構成的な行為。積み木、シール、ユニット的な雑材など。
⑦スクリブル系	描く、塗るなど平面空間に関わる行為。パス、フェルトペン、絵の具など。
⑧意味系	意味づけ、見立て、ごっこなど象徴機能を発揮する。上記①～⑦のタイプにプラスして、多様な活動の中に現れる。身近な素材など。

表2 初期的造形行為の類型



*⑧意味系—4. 意味をつなぐ

.....はこの活動の後期に出現してくるもの、

-----はこの活動の前期から出現することを示す。

表3 造形行為の種類と造形遊びのエレメント

造形行為の種類	造形遊びのエレメント
1. 感覚運動	A. 材料
2. 探索	B. 場・空間
3. 構成	C. 構成
4. 意味	D. 操作

幼い彼らが画面という描画空間を探索している、なぐりがきは空間を探索し、描画空間の認知や空間内の構成を試行しているとも見ることができる。

2. 内容からの検討

はじめに造形活動のタイプ①～⑧と造形行為の種類1～4を比較してみよう(表1)。

0～2歳児の造形活動のタイプは8項目、造形遊びの分類項目は4項目である。前者の項目は後者の2倍設定する必要があった。造形遊びは小学校低学年から高学年に亘って図画工作の内容として行われるものであるが、幼稚園や保育園の造形活動においても造形遊びは造形表現の内容に加えられてきた。

ここでは、0～2歳児の造形行為を造形遊びの内容と比較検討しようとしているのであるが、保育現場で0～2歳児の造形行為はまだまだ「造形」としての観点で捉えられていないのが現状である。初期的造形行為が表現か、という疑問に対して受け手のスタンスを最重要ポイントとしたうえで、表現であるとの結論を出したことが危うい現実である。未満児の遊びは総合的である、というくり方に埋没しないように、3歳以上児の造形行為より以上に様相を異にする諸相に対応するためには、8項目という分類の観点が必要であった。

顕著に見えるのは、⑥構成系と⑧意味系を除いた6つの系が、造形行為の種類における‘探索’と関連をもっていること、①もの系と⑥構成系を除いた6つの系が活動後期に造形の種類の4. 意味と関連をもつことである。

次に造形遊びの内容と初期的造形行為の種類を対照すると、A材料は一部1感覚運動に、多くは2. 探索と対応、B場所や空間は2. 探索に対

応、C構成は3. 構成に、D操作は2. 探索に対応する。構成を除いた内容すべてが2. 探索に対応する。表2からも、初期的造形遊びが探索活動と深く関わっていることが読み取れることから、造形遊びと0～2歳時期の探索活動はもの、空間を探ること、また、ものや空間を探り自分と周りの世界との関係を認知する、表現の基盤を構築する行為として密接な関係をもっていると考えられる。

VI 探索活動＝初期的造形行為

0～2歳児の造形行為は一つひとつに意義があり、基本的には類型を作成しにくいものであった。造形と直結する構成的活動、感覚運動や探索、意味系の活動はこの時期の造形行為の核になるものである。

今回比較検討した結果、造形遊びの内容を構成する原点とも言える行為が、初期的造形行為の種類にすべて含まれていることが確認された。そして、もっとも重視すべきことは造形遊びの内容のほとんどを、造形行為の種類における「探索」(表2)が含んでいることである。

5歳児が紙をつなぐ造形遊びを幼稚園の施設すべてを探索するように空間を拡げていった活動を思い返してみると、0～2歳児が身近な空間にWho are you?と挑む姿とダブルイメージになる。空間の規模は拡大し、素材の材質や形状は教材化して手法が複雑化してはいるが、探索的な子どもの姿には連続性が認められる。0～2歳時期の探索活動は、造形活動の初期的行為であり、探索活動は造形遊びの内容に生かされていると言えよう。

現場で乳幼児の活動を継続的に観察することや、保育者が保育の中で実感する乳児期の探索活動が及ぼすそれ以降の造形活動への効果は実証されているとは言えない。過去経験を通して形成された認知構造とずれをもつ不調和な刺激に対しては、平凡な刺激より強い探索行動が生ずる(Berlyne, 1960; Hunt: 1960, Faw & Nunnally: 1967)ことが明らかになっている。また、その後の発達の研究では、就学前の幼児では不調和な刺激の効果は見られないが、7歳以上の子どもではこの効果が高まる(Faw, 1970; Faw & Wingard,

1977)ことがわかった。幼児の場合は内部情報量が少ないことと、蓄積された情報を選出する情報処理能力が低いいため、効果が出にくいと見られる。

4歳2ヶ月から5歳9か月の幼児を研究対象に加え、短期的な先行経験の効果を検討した研究では、幼児の段階でも先行経験の程度が大きい場合、不調和な刺激の効果が探索行動に現れることがわかっている(小林:1981)。¹²⁾

探索行動の短期的な経験が、先行経験として効力をもつことを、初期的造形行為の経験の後年への効果として読み替えることはできない。しかし、初期的造形行為を十分経験することが、探索行動の先行経験と同様の効果をもって、3歳以上の造形活動への意欲を向上させ、主体的な造形活動への参画と表現の独自性を生む基礎をつくると考えられよう。

私たちは0～3歳児の造形活動への取り組みが、その後の子どもたちの造形行為や表現活動の活性化につながると考え、1983年9月に「保育造形研究会」立ち上げた。大阪府内の保育園を会場に0～3歳児の造形活動を積極的に推進してきた。現在でも大変希少な0歳からの公開保育を中心とする造形保育研究である。残念ながら、運営上の問題で2001年閉会したが、0歳児からの造形保育が果たす意味は大きい。

造形活動の原点は0歳児の造形行為にあり、造形遊びの原点は0歳からの探索活動に求められる。子どもたちの豊かな想像力や表現力の育成には、0～2歳児が探索活動が十分でき、初期的造形行為が表現として受容される環境が必要であろう。

註及び引用文献

- 1) 辻田義邦, 板良敷敏, 『造形遊びの魅力』, 日本文京出版株式会社, 1983年, pp.183～184
- 2) 文部省『小学校指導書 図画工作編』, 日本文京出版株式会社, 1978年, p.20
- 3) 文部省『小学校指導書 図画工作編』, 開隆堂, 1989年, p.2
- 4) 文部省『小学校学習指導要領解説 図画工作編』, 日本文京出版株式会社, 1999年, p.3
- 5) 厚生省『保育所保育指針』, フレーベル館, 1999年, pp.17～31
- 6) 今井和子『自我の育ちと探索活動』, ひとなる書房, 1999年, pp.189～190
- 7) クラウシス・モレンハウアー, 真壁宏幹他訳, 『子どもは美をどう理解するか』, 玉川大学出版部, 2001年, pp.177～183
- 8) グリン・V. トーマス/アンジェル・M.J. シルク, 中川作一監訳, 『子どもの描画心理学』, 法政大学出版局, 1996年, pp.153～173
- 9) 花篤實他編著, 『幼児教育法 絵画製作・造形』, 三晃書房, 1975年, p.78
- 10) 花篤實他編著, 『造形表現』, 三晃書房, 1994年, pp.54～56
- 11) 花篤實他編著, 『造形表現』, 三晃書房, 2002年, pp.89～92
- 12) 小林好和, 「子どもの探索行動におよぼす選考経験の効果」『教育心理学研究』, 1981年, 第29巻第4号, pp.157～160

[資料]

造形遊びの推移—小学校学習指導要領よりの抜粋

- 1978年 低学年において扱う 「造形的な遊び」として新設
- A 表現 (1) 材料をもとにして、楽しく造形活動ができるようにする。(1年生)
- ア 土、砂などの材料に親しみ、前進的な造形活動をすること。
 - イ 自然物や人口の材料の色や形に関心をもち、それからつくりたいものを思い付いたり、それを体につけて楽しんだりするなどの像毛的な遊びをすること。(その使い方を工夫したりするなど…2年生)
 - ウ 自然物や人工の材料を並べる、つむ、版にして写すなどの造形的な遊びをすること。
- 1989年 低・中学年で扱う 「造形遊び」となる
- A 表現 (1) 材料をもとにして、楽しく造形活動ができるようにする。(1年生)
- ア 砂、土、粘土などの材料に親しみ、それらをもとに体全体を使う造形遊びをすること。
 - イ 身近な自然物や人工の材料の形や色などから思い付いた体全体を使う造形遊びをすること。
- (1) 材料をもとにして、楽しく造形活動ができるようにする。(2年生)
- ア 身近な自然物や人工の材料の形や色などから思い付いた体全体を使う造形遊びをすること。
 - イ 身近な自然物や人工の材料の形や色などの特徴に関心をもち、それらを並べる、積む、組むなどの思い付いた造形遊びを工夫すること。
- (1) 材料をもとにして、造形活動の工夫ができるようにする。(3年生)
- ア 身近な材料の色や形の面白さなどの特徴に関心をもって集め、その特徴の生かし方を試しながら思い付いた造形遊びをすること。
 - イ 木切れなどの身近な材料の形や色などの特徴を考え、切ったり、組み合わせたり、結合させたりして新しい形をつくるとともに、その形から発想してつくるなどの造形遊びをすること。
- (1) 材料をもとにして、造形活動の工夫ができるようにする。(4年生)
- ア 身近な材料の形や色、活動の場所の特徴から思い付いたり、みんなで発想したりした造形遊びをすること。
 - イ 木切れなどの身近な材料の形や色などの特徴を生かし、切ったり、組み合わせたり、結合させたりして新しい形をつくるとともに、その形から発想して楽しい形をつくるなどの造形遊びをすること。
- 1999年 全学年で扱う
- A 表現 (1) 材料をもとにして、楽しい造形活動をするようにする。(1, 2年生)
- ア 身近な自然物や人工の材料の形や色などに関心をもち、体全体の感覚を働かせて、思い付いたことを楽しく表すこと。
 - イ 土、木、紙など扱いやすい材料を使い、それらを並べる、つなぐ、積むなど体全体を働かせて造形遊びをすること。

- (1) 材料や場所をもとにして、楽しい造形活動をするようにする。(3, 4年生)
- ア 材料や場所、物をつくった経験から発想したり、みんなで話し合っ
て考えたりして楽しく表すこと。
 - イ 木切れなどの材料や場所の特徴をもとに、組み合わせる、切っ
てつなぐ、形ウイ変えて造るなど工夫し、新しい形をつくととも
に、その形から発想してつくりだす造形遊びをすること。
- (1) 材料や場所などの特徴をもとに工夫して楽しい造形遊びをするようにする。
(5, 6年生)
- ア 材料や場所などの特徴をもとに発想し、よさや美しさなどを考
え、想像力や創造的な技能などを総合的に働かせて楽しく表現す
ること。
 - イ 材料や場所などに進んでかかわり合い、それらをもとに構成し
たり、つくるものと周囲の様子を考え合わせて表したりしながら
造形遊びをすること。

以上

The Search Activities as an Initial Act of Formative Activities

— Comparison Examination on with Formative Play —

Oku, Misako*

1999年に小学校学習指導要領に、低学年から高学年すべての学年にわたって「造形遊び」が図画工作のA表現における内容として置かれた。1978年に「造形的な遊び」として低学年を対象に登場して以来、約20年経過したことになる。図工の内容に大きい変化をもたらした「造形遊びは」、造形表現の基本的な能力を培うものとして現在その位置を担っている。

また、「造形遊び」の内容である、材料、場・空間、構成、操作を造形活動のエレメントとした活動は、その展開のプロセスが乳幼児の初期的造形行為と様相が類似している。「造形遊び」と「0～2歳児の造形行為」から採集できる共通した要素を、乳児期からの探索活動がかなりの程度で含んでいることに着目して、「造形遊び」と「0～2歳児の造形行為」を比較検討することにした。子どもが探索活動を通じて世界を探り自我を確立するプロセスで見せる多様な探索行為の中にこそ、造形活動の基礎となるかわりが存在することを、造形活動の事例を挙げて示したものである。

キーワード：乳児の造形行為，造形遊び，探索活動